

## BUILDプログラム 2023年度自己点検・評価報告書

### 学内からの視点

#### プログラムの履修・修得状況

本教育プログラムを構成している3科目のうち「コンピュータ・リテラシー」は全学の選択必修科目、「統計学」は義務留学出発前の推奨科目となっている。全学生の履修状況については、ATOMS(教学システム)にて、教務課や担当教員、アドバイザーが把握できるほか、AIMS(LMS)にて、当該プログラム科目群の各授業、課題等の取組や提出状況を確認できるようなシステムを整えている。さらに、プログラムコーディネーター、当該科目所属領域の領域長、担当教員が、プログラムの修得状況、成績評価、授業評価アンケート結果を踏まえて各授業科目やプログラムの包括的な改善についての審議を行っている。

当年度のBUILDプログラム履修者数<sup>1</sup>は160名(前年度148名)であり、修了者数は73名(前年度41名)だった。なお当プログラムは、2021年度以降に本学国際教養学部に入学者を対象としたもので、卒業までに次の全ての条件を満たした学生が修了認定されるものとなっている：

- 「統計学」(3単位)を修得
- 「コンピュータ・リテラシー」(3単位)又は「人工知能と人類」(3単位)を修得
- 合計6単位修得

このことから当プログラムは複数年度にまたがるものとなる場合が多く、当年度だけで見た時に、必ずしも修了者数は履修者数の内数とならないことに留意されたい。

#### 学修成果

当プログラムで掲げた学修成果は、次のとおりである。

- 数値情報を活用するためのリテラシー
- データ収集・分析・提示に必要な一連の能力
- 現在のデータ指向社会についての正確な認識
- データに基づく意思決定の経験と適性
- AI関連技術の社会的・倫理的影響に対する理解

これらは、プログラム内の科目における到達目標とその成績評価として確認している。

当年度における修了者のBUILD-GPA<sup>2</sup>の中央値は3.50(前年度3.65)であり、引き続き高い水準を維持していることから、修了生は学修成果で掲げた能力・資質は十全に備えていると言える。

#### 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

科目ごとに実施される学生への授業評価アンケートは、学修内容の理解度、到達目標の達成

<sup>1</sup> 本報告書において履修者数及び修了者数は[文部科学省の数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度\(MDASH\)](#)における集計方法に準じている。令和6年度MDASHリテラシーレベル申請様式の記載要領から抜粋：「履修者数は(中略)『認定教育プログラム』を履修した年度に人数を計上してください。ただし、再履修者は計上しないでください。(中略)複数年度にまたがる『認定教育プログラム』の場合、履修者数については、履修を開始した初年度に計上してください。」「修了者数は、当該年度において申請プログラムの修了要件を満たした学生の人数を計上してください」。

<sup>2</sup> BUILD-GPAは、BUILDプログラムの科目のみを対象としたGPAを指す。例：ある学生がMAT200「統計学」で「A」(評価点4.00)を、DGT330「人工知能と人類」で「B+」(評価点3.30)を、それぞれ修得してBUILDプログラムを修了した場合、その学生のBUILD-GPAは  $(4.00 + 3.30) / 2 = 3.65$  となる。BUILD-GPAで算入対象するのはBUILD修了年度までに受講したBUILD科目のみとし、該当科目が3科目ある場合は、その3科目いずれもBUILD-GPAの算入対象となる。なお、評語と評価点の関係は[国際教養大学履修規程第17条\(成績評価\)](#)で定められている。

度、当該分野における能力やスキルの習得度、更なる学修への意欲についての項目を設けて確認している。

当プログラムを構成する科目全体でみると

- 「学修内容への理解が深まった(Moderate/Substantial/Exceptional Progress)」と回答した学生は当年度94.0%(前年度96.6%)、
- 「学修目標の達成した(同)」と回答した学生は当年度94.9%(前年度98.0%)、
- 「当該分野における能力やスキルの習得できた(同)」と回答した学生は当年度94.5%(前年度95.7%)

といずれも非常に高い水準を維持できている。また「当該分野における更なる学修の意欲がある」に対してStrongly AgreeまたはAgreeと回答した学生は当年度74.0%(前年度82.7%)であった。前年度からの低下は見られるものの、当プログラムが始まった2021年度以来、70%以上の高い水準を維持しており、引き続き、後述「数理・データサイエンス・AIを『学ぶ楽しさ』『学ぶことの意義』への理解が深まるような取組」にある内容を通じてこの水準の維持向上を図っていく。

学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

当プログラムを構成する科目を含む、ほとんど全ての科目で行っている授業評価アンケートでは、科目を選択した理由とともに、他学生に当該科目を勧めるか、という点を自由記述で回答してもらっている。

当年度、当プログラムを構成する科目全体では「この科目を勧める」とした回答が25.5%(前年度19.7%)だったのに対して、「勧めない」としたのは2.6%(前年度1.4%)で、引き続き「勧める」回答が大きくリードしている。

全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

本学では、教育目標達成するための学修の探求方法のひとつとして、量的論証を取り上げ、全学生に身に付けさせたい能力育成のため、情報基礎科目や数学を選択必修としている。本教育プログラムを構成する「コンピュータ・リテラシー」「統計学」は、この要件の重要な科目のひとつであるため、年次進行に伴い履修率は向上することを想定している。

当年度における履修率<sup>3</sup>は50.4%(前年度28.4%)であり、申請段階における2023年度の予定履修率(50%)と比しても順調に向上していると言える。

学外からの視点

教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本教育プログラムの修了者を教学システム(ATOMS)にて適切にモニタリングすることにより、卒業時教学調査、進路・就職状況等、追跡調査が実施可能である。なお、現時点では本教育プログラムを修了した卒業生はまだいないが、今後本プログラム修了生の活躍状況を調査することとする。

産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

本学では応用国際教養教育(Applied International Liberal Arts; AILA)という教育手法のもとで、当プログラムの科目を含む全学的な取組として、学生たちが正課・準正課の活動を通じて学んだ内容を実社会に応用する力を涵養できるように、実践的な経験を蓄積していく諸活動を、産業界と連携しながら推進している。

<sup>3</sup> MDASH認定プログラムにおいて、履修率の定義は「対象学部等の標準修業年限をn年とした時に、当プログラム履修者数の直近n年分の合計を、収容定員で除した数」であることを、文部科学省のMDASH所管部署に確認済みです。

BUILDプログラムに関連した分野の取組としては株式会社Murakumoと提携した「DX・データサイエンス人材育成プログラム」が挙げられる。同プログラムは、学生たちがプログラミングを通じたマイクロコンピュータの制御や、データの設計・可視化・分析を実践的に学ぶ準正課の取組であり、参加した本学学生も高い評価を得ている。本学学生でもDXやデータサイエンス領域に関心を持つ学生は年々増えており、今後も同様のプログラムを全学的に展開していく計画である。

BUILDプログラムに対して直接的に産業界からの意見を得る仕組みはないものの、1学部1学科という規模の小ささを活かして、上記のような産学連携の取組を通じて得られた本学学生やカリキュラムに対する意見は、今後も適時BUILDプログラムの内容にも反映していく。

数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」への理解が深まるような取組

当プログラムの科目は、いずれも学生たちにとって身近な活用事例を入り口に、実際のデータを用いた実践的な課題やディスカッションなどの能動的な授業形態を取り入れることで、学生たちは数理・データサイエンス・AIを学ぶことの意義や、その楽しさを自然と体感できる構成となっている。また、当プログラムとも関連した取組として本学では「超域学修ルーム」を開設しており、学生たちが気軽に立ち寄って数学を始めとしたSTEM関連分野の活動や資料に接することができる環境を整えている。

内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

学生による授業評価アンケートの意見や講義担当者からのフィードバックを活用しながら、講義内容、講義資料の改善に努める。また、各授業においては、シラバスの中で、AILA Elements（応用要素）の項目を設けて、他分野との関連性や社会への適用・応用性について紹介している。また、これらの社会的視点を授業内容や課題に盛り込むことで、学生には学んだ知識や能力が関連業界を含む社会で通用することを意識させている。さらに、社会に貢献できるよう、身近な事例を用いた「分かりやすい」授業内容となっている。